

# ● 第18回 東京国際音楽 コンクール《指揮》

宮 沢 昭 男

当コンクールは半世紀を超える歴史を築いた。1967年から3年ごとの開催で第18回。これまでにない注目すべき結果を生んだ。18年ぶりの日本人優勝、初の女性優勝者、そして3位まで日本人が独占した。

結果は次のとおり。

- ◆1位 沖澤のどか（日本）（特別賞・齋藤秀雄賞受賞）
- ◆2位 横山 奏（日本）（聴衆賞受賞）
- ◆3位 熊倉 優（日本）
- ◆入選 アル・リー（カナダ）

【審査委員長】外山雄三、

【審査委員】ウェルナー・ヒンク（オーストリア）、カン・ドンスク（韓国）、アレクサンドル・ラザレフ（ロシア）、尾高忠明、ピーター・パストリッチ（米国）、ユベール・スダーン（オランダ）、広上淳一、高関健。

今回、世界42カ国・地域から238名の応募があった。内訳は男性193名、女性45名。これは、前回（40カ国・地域から239名）に並ぶ応募数である。国際音楽コンクール世界連盟に加盟して開催された前回から、参加者が飛躍的に伸びている。世界連盟加盟に加え、半世紀に及ぶ歴史から、指揮者を目指す新たな世代の当コンクールの充実し期待はさらに高まるだろう。

世界が新たな指揮者像を求める今、コンクール継続という課題はもちろん、今後、当コンクールが歴史を作る場へとますます真価が問われる。それにいかに応えるか、当コンクールの舵取り、運営の腕の見せ所になるだろう。

まず応募者の中から書類と映像で出場者を選考する際、今回は「映像予備審査及び映像審査委員会」を設置し、第1次予選のために18名（9カ国）を選んだ。内訳は男性15名（9カ国）、女性3名（1カ国）。

つまり、蓋を開けてみれば女性応募者で出場できたのは今回、日本のみである。日本の女性応募者数9名（男性58名）、韓国女性が12名で同国男性（11名）とほぼ同数、イスラエルは女性が4名（男性2名）、スイスは女性2名（男性1名）というように、女性の応募者の方が多い国もある。実力の世界だけに数のみで検討するのは危険だが、日本は音大3校から各1人ずつ聴くことができたのに対して、世界的には、結果として偏りがなかっただろうか。

会場は東京オペラシティコンサートホール。日程は第1次予選（10月8日、9日）、第2次予選（同10日、11日）、本選（同14日）。演奏は第1次、第2次予選が東京フィルハーモニー交響楽団、本選は新日本フィルハーモニー交響楽団である。本選出場者は、当コンクールで2つのオーケストラを体験できる。

第1次、第2次は課題曲。本選・「課題曲」とともに、審査対象はコンテストが指揮者としてリハーサルをどのように行うかにある。その上で本選「自由曲」に挑み、本番さながらに自らの音楽を打ち出し結果が決まる。

第1次は、ハイドン「交響曲第82番ハ長調Hob.1:82 Bärenreiter版。持ち時間20分でリハーサルの仕方が審査される。オーケストラとのコミュニケーションの取り方を問うのは重要である。とはいえ、「20分で果たしてどれほどの意味があったか」と疑問を呈す受賞者もいた。本人たちも納得ゆく審査がコンクールの質の向上と定評につながるという意味で、審査委員会の趣旨を生かして検討の余地があるのかもしれない。第2次に向け8名を選出した。

第2次は3曲の課題曲。武満徹「弦楽のためのレクイエム」Salabert版、ラフマニノフ「ピアノ協奏曲第3番ニ短調」Boosey & Hawkes版、（ソロは横山幸雄）、バルトーク「管弦楽のための協奏曲第1・4楽章」Boosey & Hawkes版である。審査の結果、本選に向けて4名を選出した。

本選は課題曲と自由曲を審査する。課題曲はメンデルスゾーンの序曲「静かな海と楽しい航海」Breitkopf & Härtel版。自由曲は、事前にコンテストが提出した3曲の中から、実行委員会が演奏曲目を決定する。

本選4人は9歳の年齢差があり、課題曲では経験の差が音の厚みと表現力に端的に現れた。だが一気呵成に挑む自由曲では、構成感よりもコンテストの内面や音楽的な感性がものをいうのだろう。

本番さながらの自由曲では、指揮者が舞台袖に登場した瞬間から審査の目も注がれ緊張感も高まる。年齢や経験値を超えて、コンテストの感性が楽団を惹きつけ魅力的な音楽を生み出した。曲はチャイコフスキー、リヒャルト・シュトラウス、ドヴォルザーク、エルガーが並んだ。経験と計算が豊かでも、これらはオーケストラには名曲だけに、コンテストのオリジナリティーと、その醸し出す瑞々しい音楽性にはかなわない。それが先の結果につながったのだろう。

審査員の1人ラザレフ氏は、記者会見で日本の上位独占について触れ、日本が指揮のスタイルを確立していると述べた。